海國兵談第十三巻　（現代語訳）

操　練

操練とは、軍を出動させる時は言うに及ばず、平時にあっても人馬に戦（いくさ）のやり方を教えておくことである。異国においても周ではこれを治兵と云い、唐では教旗と云い、明では操練と云ったが、皆同じことである。古代の日本では都に鼓吹司（くすいし）を置き、国々には軍団を置いて軍事教練を行なっていたことが史書に見られる。その他にも犬追物、牛追物、又は戯道（けどう）などと云った事も操練・教旗と同じ趣旨である。孔子も「教えざる民を以て戦う、これ之を棄てると謂う」と述べていた。しかしながら近年、日本ではこうした操練が全く行なわれず、危うい状態であると云えよう。その理由は、弓馬、鎗刀の小武芸であっても、稽古しなければ、その一芸を発揮できなくなるものである。ましてや天下分け目の大武芸を、稽古もなしに行動させることは見識を欠くことこの上ない。大将たる人は、心中深く思慮せねばならない。異国では末世（＝道徳が衰えて乱れた時代）になっても、よく操練を実施しているようである。それと云うのも、太閤豊臣秀吉の朝鮮征伐は明の万暦年間であり、その国では数十年間にわたる平和が続いていた時代であったが、明から朝鮮に加勢しに来た軍勢どもは、その動止（どうし）駆引（かけひき）が甚だ自在であって、一身を使うかのようであると云って、日本の諸将が大いに驚いたのであった。又近年になって明和（一七六四～一七七二）の頃、支那の福州に漂流して三年後に日本に帰国した者どもが語ることを聞いたのであるが、南京省に滞在していた間に軍の稽古を度々見ることがあったと云う。今の清も康熙帝以来、百余年の穏やかな世が続いており、その上、南京省は首都（北京）を去ること四十日路の

辺鄙（へんぴ）な場所であるが、右記のように軍事を疎かにしないのは、手の行き届いた政治であって羨ましい限りである。さて、日本の軍は操練もなく、軍法も粗末なものである。ただ国土自然の英気に任せて、その鉾先が鋭いだけである。支那の兵と接戦すれば、一旦は勝利を得るであろうが、長期戦になって位詰（くらいづめ）（＝敵を制圧する備を立て、敵の動きに応じて徐々に追い詰めていくこと）に遭えば、軍法が厳重ではないことから、必ず瓦解して敗れるであろう。兵を用いる者は、この所をよく会得して、操練と軍法を忽（ゆるが）せにしてはならない。操練の仕方については、左に大略を記す。さらに広く考察して教えよ。ただし、細かいことに拘泥せずに、大筋をしっかりと教えるようにせよ。

○操練するには、先ず操練を実施するための場所を設けよ。概ね大きくて六～七里（約三・九～約四・六km）四方、六町（六五四・五四m）で一里である　小さくて四～五町（約四三六・四～約五四五・五m）から十町（一〇九〇・九m）程である。国の大小、人数の多寡に応じればよい。これを大馬場と云う。ただし、この大馬場は総人数を集めて、大操練をする場所なので、年に二度だけ設ければよい。二月　八月　それ以外の小操練は、末巻で図示する大学校の敷地内で教えよ。その教育法も末巻に記してある。

○第一に、第八巻目に言及しているところの押前（＝前進）、陣取の要領、又は野陣の張り方などを教えよ。

○次に全ての軍兵が陣屋に居る時、陣触れ（＝出陣命令の伝達）の要領を操練せよ。その仕方は、薄板に「何日、何時、何処へ出陣」と書く。ただし、出陣の行く先を省くこともあるだろう。この札を三尺（約九一cm）程の竹に挟んで、幟（のぼり）のようにする。この幟を本大将から一札を三人ずつに持たせて番頭の下に遣わすのである。ただし番頭が七組であれば、この札を七枚こしらえて、一頭に一札ずつ遣わすことになる。

勿論、使いの者は直に番頭に対面して相渡し、控えて居るのである。その時、番頭は自筆にて「(自分の)姓名、承る」と書いて、別に使者を仕立て、手下の百人頭に遣わす。その時、百人頭が自筆にて書き付けるのは、番頭と同じである。ただし、百人頭が何人あろうとも、番頭の使いが持ち回るようにせよ。次々に持ち回って最後の百人頭を終えて持ち帰ったならば、(その札を)大将の使者に返納せよ。大将の使者はこれを持ち帰って、直に大将軍に納めよ。そうして、百人頭は各人が右記の札を写し取って、手下の小組頭共を呼び集めてその札(写し)を見せて、その札に受令の署名をさせよ。小組頭は又、その札を写して持ち帰り、手下の首立(主立)五人を呼び集めて、右の札を貸し与えよ。五人の首立(主立)はその札を借りて帰り、面々の組員である四人の軍士共に見せて、その札に皆の爪判(拇印)を取って、右の札を小組頭に返納せよ。このようにすれば、百万人の軍士と云えども、一々受領判を取ることで、確実に知らせることができるのである。

○次に貝の吹き方を教えよ。その方法として、一番貝は起床である。起きて飯の用意をせよ。二番貝は支度である。装具で身を固めよ。三番貝は集合である。出て陣門に整列し、大将のお出ましを待て。さて貝には様々な吹き方があり、その決まりごとがやたらと多いが、戦場の騒がしい中で事細かな合図は聞き分けるのが難しく、却って間違いの元になることもあるだろう。そうであるから、ただ貝は貝とだけ定めよ。ただし、急速に吹くか、冗長に吹くかの二通りに吹き分けることはすべきであろうか。

ただし、出陣に貝、拍子木等の鳴物を一切禁じて、密かに出陣することもある。

このような場面も又、操練すべきである。

○次に太鼓の作法を教えよ。その方法は敵との間合いが四～五町(約四三六・四～約五

四五・五m）から二～三十間（約三六・四～約五四・五m）に詰まるまでは、緩く打つ。大概は太鼓一声に一歩足を運ぶように定められている。そうして敵との間合いが二～三十間（約三六・四～約五四・五m）に詰まったならば、双方が睨み合ってそれ以上は間合いが詰まり難くなるものである。その時は居敷（おりしき）（＝片膝をつく姿勢）をして弓・鉄砲を連ねて発射し、太鼓を三拍子の頭付（かしら）けを打って早太鼓に直せば、士卒は無二無三に矢煙の下から敵隊に飛び込むのである。軍法の巻でも述べたように、頭付けの太鼓を聞いても進まない者は、その頭、並びに鑑軍（めつけ）がよく見覚えて報告し、戦が済んだ後に斬って棄てよ。こうした場合の太鼓は、馬上太鼓でなければならない。鞍の左の居木（いき）先へ太鼓を縦に結び付けて、馬上で打つのである。

○次に押行（＝行進）要領を教えよ。しかしながら押前は人数の多寡、土地の険易に因って手順が同じではないので、一概には言い難い。ただ行列を乱さないことや、大小便をし、草鞋等を着替える等のあらましを教えなければならない。（この仕方は一騎前の巻に記してある）

○次に押行の道中（＝行進中）において敵に遭遇した時の行動を教えよ。行進途上においても、常に前後左右の物見を用いるようにせよ。そうして東の方に敵ありと物見から報告があれば、旗本で鐘を鳴らして、押行人数（＝行進縦隊）を停止させる。その時、総員居敷して旗本の下知を待て。敵の有無を諸軍に通知するには、前述したように旗を用いる。その仕方は第七巻目で述べたところの内容を教えよ。さて居敷にて旗本の下知を待って、敵に攻めかかるのが基本ではあるが、敵の軍勢が無二無三に突入して来るならば、旗本の下知を待つことなく、敵と接触した備が直に取合って合戦せよ。もっとも遊軍はその後方に詰めるか、敵の側面を打撃するかせよ。その他の備は妄りに動揺せず、各方角に向いて居敷しながら旗本の下知を待て。下知があるま

では少しでも動いてはならない。

○次に押行の道中（＝行進中）において、両方向に敵を発見した場合について教えよ。三方向、四方（全周囲）についても皆、同じように教えるのである。

○次に押行人数（＝行進縦隊）に鐘を鳴らして停止させることを教えよ。その方法として、先ず旗本が足を止めて鐘を鳴らしたならば、先陣は行き過ぎ、後陣は押し詰まって難儀することになる。そこで人数（縦隊）を停止させるには、行進しながら鐘を五声打て。その時には諸手も鐘を鳴らして応ずるのである。鐘を打つ方法は一呼吸に一声打つようにせよ。そして六声目に旗本の足を止め、それ以外の梯隊も聞きつけ次第、足を止めるならば、先陣が行き過ぎることもなく、後陣が押し詰まることもなくして、行列が整うのである。

○次に敵と我が備を押出して、大競合いとなる場面を教えよ。その手順、突破口をつくるのに六つある。全ては陸戦の巻に出ている。その記述内容に基づいて操練せよ。これは特に重要な操練である。

○次に敵を踏み破って追撃する時のことを操練せよ。これ又陸戦の巻にある。

○次に味方が敵に追撃されている時に、二の見から敵の側面を打撃する場面を操練せよ。これ又陸戦の巻にある。

○次に馬入れ（＝騎馬での突入）の場面を操練せよ。馬入れには三つの方法がある。これ又陸戦の巻にある。

○次に敵が馬入れするのを阻止する場面を操練せよ。これ又陸戦の巻にある。

○次に長柄(鑓)備の立て方を教えよ。これ又陸戦の巻にある。

○次に長柄備を破る要領を教えよ。これ又陸戦の巻にある。

○次に大砲の撃ち方、又大砲で砲撃する場面を教えよ。二つとも陸戦の巻にある。

○次に城攻めの方法を教えよ。中でも特に仕寄（＝城に近寄る）の技は、その実行が難しいものである。しっかり教えよ。詳しいことは城攻めの巻にある。とりわけ居敷しながら（低い姿勢で）仕寄る技を十分に習得させよ。

○次に守城の各種方法を教えよ。その方法は籠城の巻にある。総じて城攻め、籠城の二条には書かれていることが多いので、よく意識してその本質を分かり易く教えよ。

○馬を教えることについては、十五巻目、馬の条で詳しく述べている。

右に述べた以外にも、楯の持ち方、虚敗（そらにげ）（＝偽の敗走）の仕方等、思いつくものを次々と教えよ。なお、この他にも軍中の礼式がある。時間に余裕があれば教えよ。戦が巧いか拙いかは全てこの操練にあるので、忽せにしてはならない。日本の軍は操練をしないので、無法の戦（いくさ）が多い。太閤・秀吉の猛威と云えども、朝鮮において明軍の堂々整斉とした姿に仰天したことがある。この他にも和漢の軍立ての精粗の様子を、諸軍記を読んで学べ。皆、操練するのとしないのとにある。孔子が「民に教えざるを以て戦う、これを棄てると謂う」と言ったことの意味をよく吟味せよ。さて、現在の大平の世の人に甲冑を着せて奔走させたならば、肩を引かれ、体の節々が痛んで一里（約六五四・五m）を往来することさえ困難であろう。そうであるから、操練の度毎に甲冑を着せて終日奔走させていれば、度重なって自然と甲冑に慣れるので、肩も引かれず、体の節々も痛まず、足も重くなく、息も切れず、後には二～三日甲冑を脱がなくても、さほど体も疲れないものである。この所が操練の妙である。よくよく配慮して教えよ。しかるに、現代のように完全に平和ボケした世の中にあって、これら

の言を発することは、実に罪多きことである。そうは云えども、始めより繰り返し云っているように、日本は海国であり、しかも隣国が多い地勢なるがゆえ、ただ外国による事変のためにもこのように教えておくべきことが、「備」という字の本来意味するところなのである。今の世で武備と云うことは、人々が絶えず口にすることであるが、皆虚談であって実用性がない。危ういこと甚だしい。武備ということを知らないよりもさらに劣っている。よくよく考えてみよ。

第十三巻終